

北平の地質學者を語る

—— 主に北京猿人をめぐる人々 ——

赤 堀 英 三

アカシアの花も散つた頃の或る日、景山大街の李四光教授のお宅へお夕飯に招ばれたことがあつた。お宅は北京大學にごく近く、庭から景山の五亭が手にとるやうに眺められた。支那の家庭としては珍らしく夫人も食卓に見えた。そして夫人が言ふのだつた。

「昨年、お國の飛行機が二十臺も北平の上に飛んで来て随分びつくりしました。……どうぞ皆様がお國へお歸へりになつたら、日本と支那とが仲よくなるやうに努めて下さい。」

これには何と挨拶を返してよいか困つた。まさか其はお氣の毒でしたとも、引受けましたと

も簡単に答へられなかつた。

食卓はしばし窮屈だつた。

「どうも學問などやつて居りますと、世間のことが分らなくなつてしまひまして……」

と僕は其の場逃れに近い答をした。すると李教授が直ぐ、

「だからよいのです、それだから人類に希望があるのです。」

と繼ぎ足して呉れた。話題はそれから別のものに遷つたが、この禪問答のやうな言葉は幾度も僕の頭の中を駆けめぐつた思ひがけない處で思ひがけない發見をしたやうに僕はうれしかつ

た。かういふ言葉は滅多に聞けない言葉だと思つた。

食事の後にも愉快に話が續いて、さすが流暢な李四光氏の日本語にもしばしばブレイキがかかるほど遅くまでお邪魔したのだつた。女學校の二年生位のお嬢さんがとき／＼お茶をついではこのそり隠れてしまふ。教授は夫人とこのお嬢さんと三人きりの、淋しいけれど靜かに楽しさうな家庭の主人である。

李四光博士は中央研究院地質學部長と北京大學地質學系主任教授とを兼任し、大學では地體構造論・地史學の外に岩石學まで講義する多忙な身でありながら、新鮮なる材料を盛つた論文をぐん／＼發表してゐる。以前にはフズリナに關する大著を物したりして比較的古い地質時代の問題を取扱つてゐたけれども、昨今は揚子江沿岸の洪積世氷河問題に専念されてゐる。(尤も十數年前の英國地質學雜誌に既に氷河の論文を載せてゐるから氏のこの方面の興味は昨今の

ものではないらしい)。一昨年秋からオックスフォード大學の招聘に應じて東亞地體構造論其他を講義するために家族と共に渡英された。

一昨年春、北平に着いてから一週間ほど經つて僕は北京大學に同教授を訪ねた。日焼けした顔の、身のひき締つた、若ければスポーツマンといふ印象の、さつぱりした人である。短かく刈られた頭髮は半ば白く見えた。

すぐ僕の北平に來た目的を尋ねて、半年や一年は直ぐ經つてしまふから、早くブランを立て、勉強すること、周口店へは早速行つてみ給へ、斐文中君に紹介して置かう、中國地質學會へ入會した方が何かと便宜があつてよいでせう、など、先方からどし／＼プログラムを立て、呉れるので、先程までは支那に來たんだからと呑氣に構へてゐた僕は急に忙しくなつた思ひだつた。李教授は氷河論に關する日本學界の現況を熱心に質ねた。

李四光氏は初め日本に留學して大阪高工の造

船科に學むだ。小説「ほととぎす」の騒がれた頃ださうだ。業卒へて國に歸つたとき、祖國は多事であつた。そしてこの青年技師は船を造らずに革命運動に参加した。革命後氏はイギリスに留學を命ぜられ、地質學者になつて歸つて來た。革命を境にこの人の生涯は大きな不整合を示してゐる。このことが話題に上ると、「海から山へ登りましたよ」とたゞにこゝしてゐるばかりである。濃厚なる教授に往年の革命志士は見出し難い。

「併し何をやつても無駄にはなりませんでした」と教授は語りつゝけた。

「造船學に必要なだつた力學の智識は地體構造論にやはり大いに役立ちました。……若いうちからあまり問題を小さくしない方がいゝやうな氣がします。」

見掛上の不整合は氏の内にあつては美しく整合してゐて、謙讓なる態度のうちに體験を通した重要なアドバイスを與へてゐる。

北平の地質學者を語る

北滿の旅から歸つた秋、教室に同博士を訪ねたとき、丁度渡英される前日だつたので間もなくお暇したが、そのとき「裴君や君達のやうな若い人々が提携して大いにやつて呉れ給へ」と言はれた當り前の言葉が妙に印象的にとき／＼僕の鼓膜に響き返るのである。李四光氏の如き親目を口にしなない親日家のあることを僕は心強く思ふ。

＊

裴文中君は周口店洞窟から北京原人の頭蓋を掘出したり、その文化層を發見したりした殊勳者である。北京大學の出身、李教授の直弟子である。本年三十四歳のときはきした青年科學者である。若いだけに思ひ切つた物の言ひ方をする男だ。僕は彼を「北平の一言居士」と名づけた。

彼曰く「アンドロリュースは鐵砲打ちだし、リサンは蒐集屋だ」と。

しかし言ふ事が當つてゐるから愉快である。

三七

四七

裴君と周口店へのエックスカーションは楽しい思出である。汽車で琉璃河までの三時間も彼の

第一圖 裴文中氏



リアンだの何だのと歐羅巴式の名稱で呼びたがるので困る。東洋は東洋でやらなければ。」
日本の學界でも全くそれと同意見だといふ答へに、嬉しさうに僕の肩を彼はたゝいた。

彼は考古學の勉強も相當深くやつてるし、日本考古學者の東亞大陸に於ける業績も仲々注意してゐる。

「支那では考古學の發達しないのは、考古學者では食へないからだ……。日本では考古學が健全に發達を進めてゐるのは美しい。……二三年うちに歐羅巴へ行つて考古學をみつちり勉強して來るつもりだ。……主にオーバーマイヤー教授について學び度い。オ教授は地質學者であつてしかも人類學や考古學に造詣深いから自分には理想的な先生だ。その次はブルイ師だ。」など、彼は顔かゝやかにして語つた。

お陰で退屈しなかつた。
彼曰く、「周口店の石器を西洋人はすぐムステ

丁度そのときは上部洞穴の發掘中で百人以上の入夫が盛んに働いてゐた。裴君はその發掘主任だからその得意さ思ふべしである。

彼の部屋には未發表の標本がきれいに並んでゐる。その傍らに鐘乳石の細かく組合さつて珊瑚樹のやうになつてゐるものが幾塊もあつた。

妻君はこれを説明して、彼の妻君はこれが大好きなんで、いつも周口店の歸りにはこれをお土産にするのだと。發掘シーズンになると殆ど周口店に籠城ださうで、北平に残つた若い彼の奥さんはシナントロプスをさぞ恨むことだらう。

外遊するときには妻君を氣候のよい日本へ住まはせて置かうと思ふと彼が話したから、それでは日本に知合ひでも居るのかと聞返したところ、別にゐるわけではないかと彼は答へた。支那人にはこれ位のお世辭は珍らしくない挨拶だから氣にするにも及ぶまい。

妻君は昨年末遂に渡歐した。聞けばブルーイ師の下で舊石器をいぢつてゐるさうである。

※

北滿の旅から歸つた僕は、北平地質調査所で元氣な翁文瀾博士に會つて少なからず驚いた。

北平の地質學者を語る

と言ふのは、一昨年の初め頃、隣國の地質學界から二つの悲報が傳つてゐた。一つは北京原人の解剖學的研究で有名なブラック教授が研究室で頓死したことであり、も一つは地質調査所々長の翁文瀾氏が南支調査中のアクシデントで再び起つ能はざる重傷を頸部に負つたと言ふことであつた。それは僕が北平へ行くやうになつた一と月ほど前のことだつた。悲報には違ひなかつたが、仕事と共に倒れるといふ、科學者としてはあらまほしき出來事であつた。北平に着いてから、協和醫院に療養中の翁氏が奇蹟的に快方に向つたといふ記事が新聞にのつてゐるのを見たけれども、僕はそれから旅に出たので、其後の様子は知るべくもなかつた。そんな重傷を負つた人が三月の後には、かうして元氣に仕事の出來るまでに健康になつてゐたからだつた。

しかしその相貌の何と異つたことだらうか。

十年ほど前に東京で催された太平洋學術會議で論文を讀む艶々した翁文瀾氏を當時學生だつた

三六

四九

僕は遠方から見たことがあつた。現在の氏は元氣であるとは謂へ、肉は落ちて頭髮は薄く、額に半拳大の凹みがべつこりと出来て何か凄味をさへ加へてゐる。けれども語る同氏は外貌の變化も頭腦に何の影響も及ぼさなかつたことを示した。精神力の強さといふやうなものに打たれた。中國地質學會の總會には支那の石炭に關する大講演をさへやつた。

北平へ發つとき二三の人から翁氏は利口な男で政治家であり抗日家だから用心するやうに言はれて來た。來



第二圖
北平地質調査所

てみると併しさういふ用心は全然無用なばかりか却つて邪魔物だといふことが解つた。科學に國境はないかも知れないけれども、國境のない

やうな科學者はつまらない。

なるほど氏の業績は純學術的のものより應用方面の仕事が多いし、現在は學術方面より事務方面に多忙らしい。最近の新聞によれば南京政府の秘書長として排日學生の慰撫演説などやつてゐる。學者が全然政治家になつてしまつては夫迄であるけれども、その人の政治的手腕が學術の振興に力を致すとすれば、その人はやはり學術への大貢獻者である。翁文澎氏の如きは明かにこの後の部類に入るべき人だと思ふ。北平地質調査所が現在の如く世界的に活躍しうるやうになつたのは氏の功績である。氏なかりせば或は北京原人も未だ永遠の沈黙の中に眠つてゐたかも知れない。

最近支那に於ける學術語彙の亂出を防止する目的で、同氏は日本語彙の採用を力説してゐる。翁文澎氏はガムシヤラな排日家ではない。

＊

翁所長の引き合せて楊鐘健氏とテイアール師

とに識り合ひになつた。この二人は中國新生代研究の好個のバッテリーである。しばしば一緒に旅行をし共著で報告を書いてゐる。楊氏は北京大學卒業後長らく獨逸に留學し、主としてアーベル教授の下で脊椎動物化石を學びて來た人である。午前は西城の調査所で、午後は東城のロックハルト會館内の新生代研究室で仕事をし、週に二回は北京大學で化石の講師を勤めてゐる。アンドリュースの探検隊に加つて外蒙古を調査したり、ハルト・シトロエンの自動車隊と共に新疆まで行つてゐる。筆の立つ人と見えて専門の論文以外に「西北的剖面」や「去國的悲哀」などの著述がある。前者は蒙古及び新疆への紀行集、後者は歐洲留學中の隨筆集である。楊君は四十位かも知れない。若禿げの大頭をして、小さい聲で話をする。極めて控へめに物を言ふ人である。李四光氏の氷河論でも、裴文中君に言はすると頭から否定するけれども、楊君は「李教授は昨今この問題に専念されて居ら

北平の地質學者を語る

れるが興味ある問題だと思ふ。」といふ調子である。

第三圖 楊鐘健氏



、ジャライノールの獸骨片を示して彼の鑑定を求めても、あれほどの専門家である彼は、最初に大きい動物の骨だらうとしか言はず、最後にやつと犀かも知れないと答へるほど控へめな人だ。ドイッ仕込と

聞いてさぞばりくした人だらうと豫想してゐたが、この豫想は當らなかつた。

「東亞に問題は實に多い。人生は短い」と楊君はせつせと勉強してゐる。裴君によれば楊君の妻君はハワイ生れの二世で支那語が話せず家庭でも先生「イエス」「ノー」でやつてるのださうだ。

ティアール師 (P. Teilhard de Chardin) は、
 つも忙しさをなす人だ。調査所と教會の仕事をか

第四圖 ティアール師

(天津北疆博物館にて)



け持ちで、ときどきは天津の北疆博物館へも出張するやうである。親切な人だ。約束の少し前

に師の部屋へ這入ると、引出しの中を盛んに引掻き廻してゐる。僕に呉れる抜刷を探してゐるのださうである。その抜刷と共に山西・陝西から探した舊石器を説明すること三時間。説明しながらフランス製巻煙草をすゝめて火までつけて呉れる。仲々いそがしい。マイデアー、マイデアーといつて、有望な遺跡や發見法まで極意皆傳に及ぶ。これで駄目ならこちらが舊石器など止めた方がよいのかも知れない。

ブラック博士なき後、師は新生代研究室を指導して楊君や裴君から父と仰がれてゐる。舊石器の大家ブールの弟子で、歐羅巴の諸遺跡も踏むでゐるし、東亞ではオルドス遺跡を發掘し報告した一人であるから、目が肥えてゐて吾々だつたら素通りする處でも獲物を嗅ぎ出すセンスを持つてゐるらしい。かういふ人と一緒に旅行がじてみ度いものである。北平調査所がこの有力なる人を引入れたのは大成功である。

★

中國地質學會は隔月に例會を、年に一回總會を催す。中國人會員の外に歐米人會員の顔も少くなく、論文は殆ど英語で讀まれ。ひどく國際的な色彩を帯びてゐる。中國人同志が討論するときでも英語でやる。之は少しおかしかつた。

昨年二月十四日から十六日まで三日間、北平地質調査所で行はれた總會に提出された論文の數は三十三ほどあつた。内容に従つて大別すると次のやうである。

層位	一〇
古生物	一〇
岩石	五
鑛床	四
土壤	二
一般	一
學說	一
計	三三

層位學と古生物學に關するものは斷然他を壓して優勢である。廣大なるワールドを惠まれ

北平の地質學者を語る

た此の國の學者は、胸のすくやうな大題目を提出することができるのである。ヘディンの西北科學考察團の收穫になる新疆に關する報告が特に目を索いた。曰く「新疆塔里木盆地之第三紀層」(ノーリン)、曰く「新疆中生代地層」(袁復禮)、曰く「新疆採集之石炭紀及二疊紀珊瑚化石」(計榮森)、等々。

之に反し鑛床學及び岩石學に關する報告は多く記述的に留まり、深く成因までに及ぼうとする如き研究方法は見られない。

提出された論文の出所關係を統計的に調べるならば、

北平地質調査所	一四
歐米人(内五題は前所關係)	九
北京大學	四
清華大學	二
南京中央研究院	一
南京中央大學	一
北平生物研究所	一

三七三

五三

其外

計

三三

これで見ると北平の地質學者、殊に調査所關係の人々が中國の地質學界をリードしつゝあることがよく分かる。之は開催地の關係もあるかも知れないけれど、論文を *By the way* として提出し得ることを考へに容れれば、北平以外の活動狀況は大體推察できると思ふ。

こゝに注意すべきは歐米人の講演者が比較的に多いことである。彼等の多數は調査所に關係するものであるが、その中には有名なるグレイボー博士もゐる。

中國の地質學界のために生涯を捧げた此の巨

匠は松葉杖を頼りに講堂に這入つて來ると、何時も一番前の席に着く。銀髪を頂いた魁偉なる容貌。何れの講演にも必ず質問を發する熱心さと元氣さである。地質學方面より推論せる「人類のアジア起源説」なる彼の特別講演は大へんな人氣を呼んだ。

調査所關係ではないがノーリン博士は靜かな如何にも北歐の科學者らしい印象の人だ。

今年度の總會は新たに築造された南京分館で行はれるさうだ。中國地質學の中心も次第に南方に移つてゆくのではないかと言ふ氣がする。

(一九三六・二)